
Thinking & Write

オリアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Thinking & Write

【Nコード】

N9171Q

【作者名】

オリアス

【あらすじ】

-----これは思考と、文字との関わり。

プロローグ（前書き）

前の小説と比べて、かなりフランクな感じになっているので、そこはご容赦ください。作者としても、リラックスした感じで書こうと思っていますので。

プロローグ

人は思考するとき、どこを使っているだろうか。今、これを読んでいる読者、またこれを書いている筆者さえも、常に思考を続け、文字という羅列の集合体——つまり、文を読む、書くという行動をとっているわけだ。では、英語で書いてあればどう感じるだろうか？

挨拶という一つの行動でも、日本語では「彼は、彼女に怒りを感じた」と書き、英語では「He felt her to angry」と表せるといえる。この英文があっているかはさておき、それは時に文体であり、行動であり、思考である。そう考えると、考える、つまりThinkingは重要な意味を持っているといえよう。

Write、つまり書くという行為についても同様だ。人は学問を学ぶ時には必ずといっていいほど手で文字を書く、という行動をとる。書くことで、その知識を身につけ、記憶させるためだと学者の人々は考えているだろうが、これは間違いである。記憶というのは、ただそれを行った、という事実を示しただけであり、意味はほとんどないといっていい。いかに記憶していたとしても、思考をしながら書く、Thinking & Write の前では何の意味も持たないからだ。

—————常に思考を続け、書き続けよ。つまりはそういうことだ。

だらだらとした説明文で申し訳ないが、これはこの物語に必要なことであり、知っておかなければいけない知識であるのだ。良く言

うだろう？ 物事には決まりごとがつきものだ。この考えに疑問を抱いた君、それこそ思考を続けている証拠であり、Writeへと至る可能性のある人物といえよう。逆に、何の疑問を抱かない、これを書いている筆者と同じような君は、もっと人を疑う事を知った方がいい。考えずに書くことだけになってしまうと、常に停滞したままのナマケモノになる恐れがあるから。

[illegible]

「あー、またこの場所か……これで何回目だ？　もう二時間は歩いてるぞ。この森少しおかしいんじゃないか？」

「だいたい、あいつがよこしたこの地図、この森のじゃねえじゃ

ねえか。どうりで、湖を探しても見つからないわけだ。ここに湖なんかあるわけないしな」

（来る前に気付かない時点でもおかしいと思うが？）

「うっさいよ。お前も気づいてたなら、さっさと見えよな……。おかげでよけいな労力を使う事になったんだから」

（しかし、困ったものだ。食料もろくに持ってきていないのだろうか？）

「あゝ、まあね。一応、非常食は持ってきてるけど、それを入れても、あと数時間って所かな。参ったよ」

（それにしては随分余裕に見えるが。だが良いのか？ これで彼女を待たせる結果になるぞ）

「だよねえ。どうしたもんやら……」

そう言うのと、彼は困ったように微笑んだ。ここで話しているのは二人のはずだが、いくら見渡しても歩いてる彼以外、姿が見えない。では、周りに誰か隠れているかといえば、人の気配を感じるわけでもない。彼以外である物といえば、本が入っている鞆だけであり、何の存在も認められなかった。

（で、どうするのだ？ このまま歩き続けるのか）

どこから声が聞こえるのかは不明だが、少なくとも彼の近くには

いるようだ。そうでなければ、彼の行動を見れないのだから。

「んゝ、とりあえず、あと10分歩き続けてなにか変化があったらそこに行くってことで。それでだめなら、野宿しかないかなあ。…めんどいけど」

（お前のめんどくさがりは、直した方がいいと思うがね。それと、自炊能力も）

「ほっとけや。お前だってまともに料理できないだろう。持ちつ、持たれつだよ」

（この場合、五十歩百歩やどっちもどっちといった方が正しいと思うのだが）

「お前、ほんとどうでもいい言葉だけ覚えてるんだな……あいつの影響か？」

（いや。私が思考して、書きだした答えだ。だが、お前の行動にはいつも興味をそそられる。大抵は馬鹿な行動が多いわ、という彼女の言葉が思い出されるな）

「まるつきり俺を馬鹿にしてんじゃねえか！ あいつホントに殴りてえ。何なの？ あいつ一体なんのつもりなの？」

（まあ、私なりの愛情表現なのよ。それを耐えてこそその男であって、それを耐えられないのは私のパートナーには認めないわ！とか言っていたが、何か関係があるのだろうか）

「あ、あいつ……そんな馬鹿な事を考えてたのか。あゝ頭痛え、

誰か何とかしてくれ。大体、何が愛情だよ。俺を使って遊んでるだけじゃねえか。もういいや、とりあえず前向きに生きよう……」

そう話をしているうちに、道の前方に看板が立てかけているのを見つけた。随分前に作られたのか、所々亀裂が入り、読みにくくなっているが、かろうじて文字が読めるようになっていているようだ。また以前、休憩所があったのか木製のテーブルとベンチがあり、その上には簡単な食事が置いてあった。

彼はそれに近づき、

「へー、うまそうだな。無人飲食店って奴か。えーと、何々、『これは先払い制です。一泊分につき、3スクール払っていただきます』か。ふーむ、どうしようかね」

と呟き、鞆に入っていた財布を取り出すと、5枚の銀貨と10枚の銅貨を眺めた。

ちなみにスクールというのは、この世界における硬貨紙幣の単位であり、オルト、スクール、ミクシの順に高価な硬貨となる。オルトは金、スクールは銀、ミクシは銅でできており、偽造ができないよう、特殊な製法で作られている。100ミクシで1スクール、10スクールで1オルトに両替できるというのが一般的な考え方だ。

また、紙幣にはセルが扱われ、それ一枚で100ミクシの価値があるとされる。一般的な大人の一ヶ月の収入は、大体3スクールであるとされ、それ以上の収入の人はほとんど中流、上流階級の人であるといえるのだ。

普通に考えれば、一泊につき3スクールという値段は法外である。

しかし、今後このような道が続いていくと仮定すると、ここで休んでおいたほうが良いと感ずるのも確かなのだ。

「ここで金を使うと、帰りが厳しくなるというのは目に見えて
いるんだがな。さて、どうしたもんかね、ロル」

（うむ、そろそろ周りも暗くなつた事だし、休むのもまた然り。好きなようにするがよい）

休みによる停滞か、行動による思考か。そして何分か考えた後、彼は行動を開始した。

[illegible]

ガサ、ガサ。物音がし、静寂が破られる。漆黒の色に染められた世界は、一瞬に。ただ一瞬に、朱に染められる。それは動。ソレが求めるのは生。ソレには思考が存在しない。ただ動くことで、自らの価値を証明し、自覚し、意識していく。横たわった人を見つめるその目はまるで、透き通った水のようにであり、聖母のようであった。

物事には決まり事を。意識には規則を。思考には行動を。彼らは認めない。彼らは決して認めない。例えそれが、彼らの祖であつたとしても。彼らを救うものであらうとも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171q/>

Thinking & Write

2011年10月8日03時00分発行